

太平洋戦争期におけるフィリピン・ルソン宣撫工作

——石坂洋次郎『マヨンの煙』

松本和也

I

太平洋戦争期における南方徴用作家の文学活動うち、本稿では主に、白紙徴用によってフィリピンでの文化工作に従事した石坂洋次郎（明33〜昭61）による従軍記『マヨンの煙』（昭18／昭52）をとりあげる。『フィリピンにおける軍宣伝の二重構造的特徴』については、中野聡に次の指摘がある。

もともと東南アジア占領地における軍宣伝には、二つの段階が想定されていた。第一段階は「皇軍に対する信倚観念」の助長——治安回復・民心安定・日本軍への信頼感獲得を——目的とする宣伝である。次に治安を回復した地域では、占領地民衆を日本の戦争目的に沿って動員するために「東亜解放の真義を徹底」させるいわゆる教化宣伝の実施が想定されていた。／後者の教化宣伝を主な目的として、日本軍が多数の作家芸術家やメディア関係者などを国民徴用令により動員、占領地各派遣軍の宣伝班に配属して「東亜解放」の「聖戦」

論を掲げた軍宣伝を実施したことは、アジア・太平洋戦争史のなかでも注目を惹いてきた事実のひとつである。フィリピンでも石坂洋次郎、尾崎士郎、今日出海、三木清ら著名の士が徴用された軍宣伝班・報道部が、「新比島建設」の意義を説いた。

この教化宣伝に関わった石坂洋次郎は自筆の「年譜」、「昭和十六年（1941）四十一歳」の項に次のように書いている。十二月太平洋戦争が勃発し、陸軍報道班員としてフィリピンに派遣された。尾崎士郎や今日出海も一緒だった。外地に出たのはこれがはじめてであり、しかも男ばかりの戦地の生活の中で、自分の虚弱なことをこの時ほど情けなく感じたことがない。「略」はじめて外地に出て感じさせられたことの一つは、日本人が男女とも体格が貧弱で、外人（主として白人）に較べて、ひどく見劣りがするといふことだった。「略」も一つ、強く感じさせられたことは、私ども日本人の暮し方では、そのままでは決して異民族に親しまれ愛される性質のものではないといふことだった。「略」私の従軍は、前線の兵

士や銃後の国民の士気を鼓舞するといふ点では、物の役に立たなかつたが、日本及び日本人を客観的に見る機会を与へられたといふ点では、私自身、非常に益する所があつたやうに思はれる。

右の記述で石坂は、フィリピンでの具体的な文化工作にはほとんどふれず、自身の「身体(虚弱)」を軸に、自国/他国の文化についての認識を新たにする契機となつたと言明している。右の感想を抱く契機となつたのは、「南部ルソン宣撫行」という副題をもつ『マヨンの煙』に書かれた異文化体験が大きいはずだ。

あらかじめ、昭和一七年「二月十七日 晴」～「三月九日 晴」の日記で構成された『マヨンの煙』の発表経緯を確認しておく。

初出は「マヨンの煙 南部ルソン宣撫行」(『主婦之友』昭18・4～11)で、「二月十七日 晴」～「二月二十六日 晴」の一〇日分が発表された。「二月二十六日 晴」の末尾には「(つづく)」と記されていたが、石坂の第二回フィリピン派遣(昭18・10～19・3)によつて中断された。その後、実に三〇年あまりを経て、石坂最後の単行本として『マヨンの煙』(集英社、昭52)が刊行され、この時に「三月一日 晴」～「三月九日 晴」の九日分が初めて公にされ、「後記」「後書き」、さらに巖谷大四「解説」が付された。なお、「あとがき」末尾には、「追記」として「本書では、明らかな誤植の箇所を除いて原稿を全く無修正で収録しているが、漢字、仮名遣いについては、新漢字、新仮名遣いに改めた」(206頁)という一文が付されていた。さらに、一、六年後の平成五年夏、原稿「マヨンの煙」が石坂洋次郎長女今泉廣子氏より青森県近代文学館に寄贈されたことで、同作の三月分の原稿等も収

めた『資料集 第四輯 石坂洋次郎・原稿「マヨンの煙」』(青森県文学館協会、平18)が刊行されるに至つた。

この資料集に付された、館田勝弘「解説 石坂洋次郎『マヨンの煙』について」によれば、寄贈された原稿「マヨンの煙」は、次のように《大きく分けて三種類》に分けられるという。

①『主婦之友』掲載分(八回)切り抜き(二月十七日～二月二十六日分)／「マヨンの煙」に副題「南部ルソン宣撫行」を付したもので、各回には鈴木栄二郎の挿絵と写真が多数掲載されている。この切り抜きには、青ボールペンで加筆部分が見られるが、大幅な訂正はない。加筆や訂正の時期は『マヨンの煙』「あとがき」の日付である昭和五十二年八月として大きな間違いはないと思われる。

②原稿「マヨンの煙」八十八枚(三月一日～三月九日分・後記)／「三月一日 晴」で始まるB四判四百字詰原稿用紙八十八枚である。青ペン書きである。この原稿は、昭和十九年三月以降に書かれたものであることは、原稿No.4の表にあたる反故原稿No.1で分かる。以下は全文である。／(ここまでに日記を書きつづけた時、昭和十八年十月、私は再びフィリピンに派遣されることになった。そして翌十九年の三月まで、約半年間フィリピン全土の復興再建の状況を視察してまはつた。この間にフィリピン民族多年の悲願であつた独立の実現をみたことは読者も御承知の通りである。また戦局も急速に緊迫して、私が発つた時と帰つた時とは国内の状況も著しい変貌を呈してゐるが、この日記もその余波を受けて雑誌に連載することを中止せねばならなくなつた。勿論そんな

私事はこの際問題ではない。いまはまづ戦争にうち勝たねばならない。もし負けたら、この日記で語られたことや考へられたこと、それからまた私達の伝統も歴史も、なにかもかりそめの仇花になってしまふ。大変なことである。どうしたつてこの戦争に勝たねばならない。さう思ひながら私はこの続稿を書きつづつもりである)

③原稿「あとがき」六枚／原稿「あとがき」は②の原稿用紙とは異なる薄手のB四判四百字詰原稿用紙が使用されている。青ボールペン書きである。一枚目の欄外に「マヨンの煙」あとがき六枚」と書かれている。⁽⁵⁾

総じて、『マヨンの煙』本編(①+②)、ただし①の加筆は除く)の記述は、ほとんど戦時期に書かれたものとみてよい。

以下、『マヨンの煙』に関する先行研究を素描しておく。単行本『マヨンの煙』に付された「解説」で巖谷大四は、同作を《貴重な「日記」》と位置づけた上で、次のように総評している。

この「日記」は、日本軍によって一応占領されたルソン島の、マニラに根拠地を置いて、地方の町や村へ出かけて行き、講演会や映画会を開いて、そこに住む人々の心をやわらげるための宣撫工作の日々の出来事を、いかにもこの作者の手柄のじみ出た、見方、考え方をまじえてつづつたもので、ほのぼのとした味わいのある読みものである。⁽⁶⁾

こうした、戦場の文化工作を背景として、『マヨンの煙』から作家性のみを掬いあげる見方は、以後も主流となっていく。水上勲は『マヨンの煙』について《「ここには何ら勇ましい話はない》、《ことさら悲惨な話もない》、《淡々とした、ところどころではほ

ほえみたくなるようなエピソードが多く、緊迫した戦争の影はほとんど見られない》と指摘した上で、同作の《大きな特色》を《いわゆる戦争文学らしさをほとんど持たないこと》にみては、《そこに石坂洋次郎のそれなりの抵抗の姿勢》を読みとっている。⁽⁷⁾ また、島田昭夫は『マヨンの煙』を次のように評している。

石坂はフィリピン人を主体とする第二分隊の隊長として宣撫工作を指揮している。従つて「マヨンの煙」は親日フィリピン人の活動が具体的に描かれ、この記録の特徴となっている。特にかつて独立運動に関係していたイカルス將軍の孫娘ロドリゲスを始めとするメメ、トアソンら三人のフィリピン女性の活動に関しては、それぞれの人間の不安、葛藤を過去の閱歷などを語らせながら仔細に描述し、単なる記録にとどまらぬ内容たらしめている。

こうした評価に重ねて島田は、《石坂にとって「マヨンの煙」は自らをも含む哀切極まる追悼の記》⁽⁸⁾だと意味づけている。『マヨンの煙』が《作家仲間の従軍記とは異なっている》と指摘する館田勝弘も、同作の特徴を次のように論じている。

これ(『マヨンの煙』)には、戦闘以外の場で営営として働く人々の描写が見られる。(略)ここには日本人とフィリピン人のありのままの交流がこられた正直にしかもユーモアを交えて書いている。とにかくこの戦争の先兵となつて宣撫の任務をなし得た満足感が最後にはある。ここに『マヨンの煙』の真骨頂があつたと思えるのである。⁽⁹⁾

また、石坂に《被占領民への温かいまなざし》を読みとる館田は、『マヨンの煙』に《戦闘場面は見あたらず、突然に生じた日

本人とフィリピン人との交流の姿が見られる」ことを特筆する。さらに、『終戦から三十二年目に日の目を見た『マヨンの煙』が《当時のままの原稿で出版された》ことよって、『石坂の戦時中を知る貴重な作品となった』と、その意義を高く評価した。^⑩本稿では、こうした先行研究の蓄積をふまえつつ、戦時下に書かれた初出・原稿に即して、同時代の視座から石坂洋次郎が従軍体験を通じて言語化した思索・民族観を中心に分析したい。

II

本節では、次節での「マヨンの煙」分析のための観点を得るためにも、従軍体験を綴った石坂洋次郎のテクストを検討する。

第一に、「マヨンの煙」連載に先立って同じ媒体に発表された、石坂洋次郎「比島従軍記」（『主婦の友』昭18・3）がある。帰還後に発表された同文では、次の従軍概要が示される。

私は昭和十六年に徴用を受け、陸軍軍属として一年一箇月フィリピンで暮した。籍を宣伝班——後に報道部と変つたが——に置き、その間、宣伝小隊に編入されて前線に出たり、宣撫小隊の一員として地方に出張したり、戡定作戦が済んだ後はマニラの本部で建設工作の文化面の仕事を担当したりしてゐた。（42頁）

つづいて、昭和一七年一二月二四日のリングガエン湾敵前上陸からの比島体験が綴られていくうちに、次の一節もみられる。

ちやうどナチア山の攻防戦が熾烈凄惨をさはめてゐた頃で、生れてはじめて血なまぐさい戦場の土を踏んだ私は、喉が涸

き神経が昂ぶつて容易に落ちつけなかつた。（略）兵隊達はさうした中で落ちついてそれぞれの任務に服してゐた。兵隊の真の美しさ立派さは戦場でなければ観られない。本人達は気がつかなくとも、傍から観ると、一種神々しい美しさがその身辺に漂つてゐることがある。（42頁）

こうした戦場で初めて体験する死の恐怖について、石坂は「二つの場合」（『文学界』昭18・9）などにも書くが、ここで注目したいのは、自身の醜態と対照するようにして、戦場における日本兵に対して最大限の賛辞を連ねている点である。こうした日本兵の姿は、石坂をして「私は戦場の経験をしつかり自分の身につけようと努めた」、「それが報道宣伝に携はる自分の使命だ」（42頁）という徴用文学者としての自覚へと至らしめるだろう。

また、石坂は日本（民族）に対する再認識を、それと対照されるフィリピン（民族）観とあわせて次のように綴っていく。

外地に在つて日本を思ふと、国家の組織といひ民族の性格といひ、日本及び日本人の優秀なことがよく分り、さういふ国に生れた有難さが沁々と胸に溢れる。殊に私の居つたフィリピンは、長い間スペインやアメリカの統治を受けて来た国なので、住民も典型的な弱小民族の性格を具へて居り、さういふものを身辺に見聞するにつけても、自分が日本人である喜びが歌のやうに胸の底から湧き上つて来た。（43頁）

こうして石坂は「外地」体験を通じて、「日本及び日本人」を「優秀」と、フィリピン人を「弱小民族」と評価していく。

第二として、『陸軍報道班員』として永らく比島作戦に従軍した石坂氏は、征装も解かぬま、「フィリピンを語る」を寄せられ

た》(無署名「編集便り」、191頁)と紹介された、石坂洋次郎「フィリッピンを語る——比島作戦従軍より還りて——」(『日の出』昭和18・2)も参照する。微用後の心境は、次のように書かれていた。

ほんとうに戦争に出かけるのだ、生きて帰れるかどうかかわからないといふ覚悟が据わつたのは、輸送船の中で、十二月八日の対米英の宣戦の詔勅をラジオで聴いた時であつた。米英相手なら大戦争になるだらうし、二度と故国の土が踏めるかどうか分らぬ。ともかく分に応じた御奉公を尽して、この戦争に勝ちぬかねばならぬ、そんな気持であつた。(68頁)

ここで石坂は、悲壮といつてよい「覚悟」を言明している。

また、小見出し「南部ルソンに宣撫行」では、「マヨンの煙」のモチーフとなつた文化工作の概要が「前線からマニラの本部に帰ると、間もなく宣撫小隊といふのが編成され、私もその一員に加はつて、南部ルソンに一月ばかり宣撫行に出かけた」、「演説を主体とし、映画、音楽、新聞、ポスター、伝単等を資料として民衆に働きかけるのである」(69頁)と紹介され、この活動を通じ、石坂は「一体に比島人といふのは、地方へ行くほどさうだが、顔も身体つきも日本人によく似てをり、素直でお人好しな民族である」という理解を示して行く。さらに、「米国の影響を受けてゐるのは、マニラのやうな大都会の上流社会の一部分と青年層の間に若干浸潤してゐるぐらゐのもので、国民の大半を占めてゐる農民階級には米国の文化の影響といふものはそんなに認められない」(69～70頁)といふ観察を示す石坂は、文化工作(宣伝)のあり方について次のような意見を表明している。

そこで日本精神の問題だが、これは徒らに抽象的な語句を

並べて日本精神を説き聞かしたところで、決して彼等の了解を得るものではなく、現地にある日本人が、襟度と節度のあつた生活をして、相互の人間の接触を通じて、日本人といふものを分らせ、徐々に日本精神といふものを理解させるやうに導いて行く。しかも終局においては、その方法が最も大きな効果を納め得るものと信じてゐる。(70頁)

ここで「抽象的な語句」とは、大東亜戦争イデオロギーを語る修辭トリックを指し、石坂はそうしたもののよりも「人間の接触」の効果を説いている。さらに石坂は、「比島民は三百四、五十年もの長い間スペイン、アメリカの統治を受けて来て居るので、白人に対する人種的な劣等感といふものが相当深く沁みこんでゐる」という主体形成過程にふれて、次の見解を示している。

さういふ彼等(比島民)に日本を信頼させ、東洋民族の自覚と矜持をもつて新比島を建設し、東亜共栄圏の確立に協力せしめるためには、まづこの人種的劣等感からたゞ直さねばならないと思ふ。彼等と同じ色の皮膚をもつ日本民族が、今後の戦争で世界の一流国と信ぜられてゐた米英を物の見事に敲きつけたことは、彼等の人種的劣等感を拭ひ去るのに何より有効な生きたお手本となつたやうである。(70頁)

こうして石坂は、敵対する米英(西洋)を対置しながら、「同じ色の皮膚」をもつ「東洋民族」としての連帯感を語つて行く。さらに、「比島において、これから新しい社会を作り上げていく上に一番問題になるもの」として「混血児の存在」をあげる。

「混血児」は「外国人の血が混つてゐて祖国觀念が乏しいし、物の考へ方も生活の仕方も、フィリッピンの昔からの風

俗習慣を無視し勝ちで、一種の国籍のない人間といったやうな存在になり易い。フィリッピンでも心ある人間は、混血児がフィリッピンを誤るものだと考へてをり、東亜共栄圏の一環としてこの新比島は、どうしても純粹のフィリッピン人の力で築き上げて行かなければならないと考へてゐるやうだ。

(70～71頁)

このように石坂は、ナショナル・アイデンティティーという観点から「混血児」、こと「白人との混血」を問題視し、「純粹のフィリッピン人」を重んじている。また、石坂はフィリッピン体験を通じて得た「民族」観について、次のように表明している。

比島民族は永い間いはゆる劣等民族として扱はれて来たために、民族的に見ると、長所よりも欠点の方が多い実状だが、われ／＼として心強いことは、あれほど永い間外国の支配を受けてきたに拘らず、持つて生れた東洋民族としての長所は今もなほ失はれずに保たれてゐるといふことだ。これを土台にして、日本が彼等を指導して行くならば、立派な民族に仕立て、行くことも不可能なことではない。(72頁)

ここに、石坂が南洋諸民族について示す二重基準は、大東亜共栄圏・大東亜文化を語る際の規範——日本民族を大東亜共栄圏の盟主として上位に位置づけると同時に、比島民族についてはスペイン、アメリカによる圧政ゆえの「劣等民族」と位置づけて序列化しつつも、日本が「指導」することによって、ともに東洋民族として西洋支配の打破を目指す言説——でもある。

第三に、石坂洋次郎「マニラの印象」(文化奉公会編「大東亜戦争陸軍報道班員手記 バタアン・コレヒドール攻略戦」大日本

雄弁会講談社、昭17)がある。石坂は「マニラ市に入つて四五日しか経たないが、その間の見聞によつて自分に植ゑつけられた第一印象」について、「いかに植民地らしい雑然とした町」(265頁)だと述べている。石坂のいう植民地らしさとは、たとえば次の観察を通じて抽出される比島民族の特質のことである。

通行人を見ても、住民はもとより支那人あり白人あり混血種あり、従つて言葉も英語、スペイン語、タカログ語等雑多ものが用ひられてゐるやうだ。見てみると、大抵の人間が二種の言葉を苦もなく操つてゐる。器用と云へば器用だが、その代りどの国の言葉もひどくお粗末なものになつてしまつてゐる。そして言語の上に見られる此の軽薄性は、そのまゝ、マニラ市の性格であるとも云へよう。

さらに、比島人を鏡に、「日本人は一般に外国語に習熟するところが不得手だと云はれるが、此処に来てみて、それは寧ろ日本人の一長所を示すもの」だと捉える石坂は、「われら日本人の血はそれだけ純粹であり、われら日本人の母国に対する愛着はそれだけ深いことを意味する」と愛国心を肯定する。それでいて、「比島の」住民はわれ／＼日本人にとつて決して赤の他人ではない」と断じる石坂は、「我等と彼等は同じ血の流れから分れたアジア人種である」(266頁)ことを根拠——前提としては、アジアの盟主——日本人としての使命感を次のように述べていく。

彼等(比島住民)の中に眠つてゐる精悍且つ勤勉なアジア民族の意識を呼び醒まし、東亜の同胞として、相協力して白人の侵略に拮抗し得るやうな民族に育て上げてやらなければならぬ。／＼今日の段階に於ける、聖戦の熱も大いなる意義は、

茲に存するものと思ふ。(267頁)

このようにして石坂は、西洋の不当な支配を批判し、日本人と比島人とが「東亜の同胞」として協力することで「白人の侵略」を排除し、それを「聖戦」の意義へと結びつけていく——これは、大東亜戦争の論理そのものといつてよく、それをなぞった石坂もまた戦時下の文学者たる運命を免れることはできなかった。

Ⅲ

本節では、前節で分析した石坂洋次郎のフィリピン体験・認識・表象をふまえて、「マヨンの煙」(昭17・2・17〜3・9)に書かれた「南部ルソン宣撫行」について多角的に検討していく。

まず、人見小隊「第二回呂宋島南部地区宣撫工作実施報告」(昭和十七年三月)に取められた、宣伝班員・石坂洋次郎「ルソン島南部地区に於ける宣撫工作に関する総合所見」を参照しておく。

同報告書は、『人見小隊は二月十七日から三月九日にわたつてタヤバス州の一部及南北カマリネス州、アルバイ州、ソルソゴン州等ルソン島南部地区の宣撫を実施した』(74頁)と書きおこされ、宣撫の概要が記された後、『今次人見小隊が巡回したルソン島南部地区の治安状態は概ね良好であるやうに見受けられた』(85〜86頁)という判断が示され、末尾には比島人に関して次の観察が記されていた。

土民は一般に日本人に好感をもつてゐるやうである。アメリカの悪宣伝があつたにも関はず民族的に血の繋がりをもつてゐるためであらう。ただ彼等は長い年代の間白人による被

搾取の生活に押れてゐるために独立自主の精神に乏しく依頼心が強い。かういふ点から考へて、次期の宣撫工作の主目的は、彼等の民族的な矜持を目覚めさせ、アジア的な勤労忍苦の精神を高揚させる点に置かれても、決して早すぎはしないと思ふ。

もちろん、同時代言説として珍しくはないが、比島人に対する「土民」という表現、「民族」という単語の頻用、さらには大東亜戦争のイデオロギーまで、右の一節には盛りこまれている。

以下、「マヨンの煙」本文を検討していく(なお、引用は、「二月十七日 晴」〜「二月二十六日 晴」は初出に、「三月一日 晴」〜「三月九日 晴」は『資料集』(前掲)に拠る)。

第一日「二月十七日 晴」には、次の情景が書かれていく。

右手からは、ナチブ、サマット、マリベレス等の連峯が起伏したバタン半島が空を圧するやうに突き出て居り、灣の入口の海上には、コレヒドールとフライルの二島がかるがるとじずかに泛び出てゐる。光線の関係で二つとも水平線から一寸ばかり浮いて見えるのが面白かつた。／＼それは見た眼におだやかな美しい眺めであつた。だが、そうあるほど、私の胸は疼くやうな痛みを感じさせられるのである。といふのは、バタン半島ではいまでも日夜凄惨な戦闘がつづけられ、私はつい先日その前線から帰つたばかりであるし、コレヒドール島からは昨夜もあかあかと戦火が燃え上るのを自分の室から眺めてゐたからである。この、表面のどかな海と空と山の朝景色の中には、どこかに血の色が塗られてゐるのである。(昭18・4、11〜12頁)

先行研究の理解に反して、石坂は「おだやか」に映じる「表面」の「景色の中」に、それと不可分な出来事として「血の色が塗られている」ことを自覚し、そのことを連載第一回に書いているのだ。また、文化工作の企図については、次の記述がみられる。

間もなく班長勝屋中佐が現れて全員と訓示を行った。それによると、私共の任務は、大東亜戦の真意を説いて地方民心の安定をはかり、従来のアメリカ依存の傾向を日本に対する信頼、協力の態度に転向させるといふ所にあつた。(同前、14頁)

くわえて、「私」は人見中尉から、「今度の宣撫行の計画概要」について、「主としてルソン島の最南端に位置する南北カマリネス州、ソルゴン州、この三州に於て対民衆宣伝を実施する」、「宣伝は演説を主体とし映画・新聞・伝單・ポスター等を併用する」(同前、15頁)ものであることも聞き知る。

ここで、「マヨンの煙」の執筆事情・方法を検討しておく。「三月三日 晴」には、次に引く本作への自己言及がみられる。

第一、従軍当初から日記を全然つけてをらないのである。懐中日誌は携帯してゐたが、これにはその日の天候と宿营地名を記してをるぎりで、それさへもところ／＼空白になつてゐる有様である。私はかう考へてゐたのである。日誌などを誌す必要はない。忘れるものはきれいさつぱりとみんな忘れてしまはう。しかもなほ自分の頭に消し難い印象を残してゐるものがあれば、それを書かう！芸術家は題材に対して王侯の如く贅沢且つ我儘であらねばならないのだ、と。(原稿No.29)

このように自身の「印象」を恃んでいた石坂であつたが、「兵馬惚惚の間にすごした一年間の従軍生活は、ただ生熱く錯雑した印象を私の脳裡に止めただけで、書かうとしてもまとまつた形で浮び上つて来るものは何一つ無かつた」、それゆえ、「今頃、同行の清水君の日誌をそつくり拝借して、それに自分の記憶を織り混ぜながら、辛うじてこの日記を書き綴つてゐる始末」なのだという。ただし、石坂は自身の目論見の失敗を「気が利かないことおびたほしい」と認めつつ、「その代り、私の最初の信念が正しければ、何時読んでも季節外れの感じがなく読める文章が出来る筈なのだが、その自信もいまはさらさない」(原稿No.30)と言明してもいた。つまり、石坂は宣撫行体験に対する執筆時の遅れを逆手にとつた普遍性の獲得可能性に賭けていたはずなのだ。その帰結は、先行研究の評価以前から、『マヨンの煙』が昭和五二年に刊行されたことにまずは明らかだが、同時に太平洋戦争期の文化工作ゆえに負の歴史性も避けがたく刻印されている(そもそも敗戦によつて「なにもかも」が「仇花」となつたはずである)。

以上をふまえ、『マヨンの煙』の時差を孕んだ書法を検討していこう。その際、事後的な加筆の痕跡が注目される。

第一に、初出および原稿／単行本間の本文異同は、仮名遣いや漢字表記、改行など軽微な箇所を除いて、二箇所確認できた。

この南部ルソン行では移動中の自動車事故が包み隠さず書かれているが、「二月十八日 晴」には、再びトラック事故の連絡が入る場面がある。当該箇所は、初出では次のように書かれた。

「隊長！ 自動車ペンコしたよ！ 人、たくさん怪我して、赤い血出たよ！」と報告した。／(ペンコはエンコの間違ひ

であり、この場合エンコでもやはり間違ひである。(昭18・5、27頁)

この箇所が、単行本になると次のように改められている。

「隊長！ 自動車ペンコ（ペンコは台湾語で顛覆の意味）したよ！ 人、たくさん怪我して、赤い血出たよ！」と報告した。(34頁)

両者とも「年の若い本島人」の台詞に変更はなく、トラック事故の実状（崖への墜落事故）に即して、当時よく知らなかった「ペンコ」について、後日、石坂が補足説明した箇所である。

もう一箇所は「二月二十四日 晴」、リブマンの町で現地住民が、日本兵に対して物価上昇による窮状を訴える場面である。単行本版では、初出にはみられない、次のような宣伝班と現地住民との交流や、現地住民の生活の実状が加筆されている。

第一人間の目付に勢いがある、これまでの所とは全く雰囲気が違う。左右の屋台店を覗きながら狭い通路を歩いていると、後から、／「日本の軍人さん……」と呼びかける者があつた。見ると、大きな箆を抱えた、五十年配の百性女だったが、明けつ放しな人懐っこい微笑を浮べて、／「みんなに代つてお願いするんですが、この辺では物価がまち／＼で困っているのですよ。それというのも金持の商人が品物を隠して売惜みをするからなんです。そんなことがないように旦那方からよく注意してやつて下せえましょ。……なあ、お前さん達」と、少しテレたように、近くで様子を眺めていた女共に応援を求めた。すると女共は口々にその事実を認め、石鹸はいくら、布地はいくら、と一々物の値段を云

い立てはじめた。私はちよつと面喰つて、／「よし。とまあかくよく調べてみよう。しかし何と云つてもいまは戦争中なんだから、お前さん方も多少の不自由は忍ぶ覚悟がないと不可いよ……」と答えた。(単行本、98頁)

この加筆修正では、初出時(昭18・9、104～105頁)には書き得なかつた詳細を加筆し、より具体的な情報が示されている。

第二に、日記の日付以降に知つた情報をパーレンで付加する記述として、初出時点で刻まれた時差の痕跡がある。「三月二日 雨」、宣伝班・現地協力者の人間関係から怒つたロドリゲスが歩いて、帰つてしまう場面に、次の補足が添えられる。

(あとで知つたことだが、フライピンでは一文無しで遠くに旅行することが必ずしも不可能ではない。といふのは、どこの家でも見知らぬ旅人に喜んで一夜の宿と食事を提供する淳朴な風習だからである。)(原稿No.22)

このようにして、当日の出来事と事後的に知つたことに時差を設けることで、日記の現在性・事実性も強調されていく。

より重要な補足としては、「二月二十四日 晴」に、宣伝班がラウレルと血縁関係がある婦人に会つた際、次の一節がある。

(読者も御記憶であらう。この六月開かれた臨時議会に於て、東條首相は、年内にフィリッピンの独立を認める意向を有する旨表明したが、その声明に依じてフィリッピンには、独立準備委員会が設置され、光榮ある初代の委員長に選ばれた人こそ、現在、行政府内務部の長官をしてゐるホセ・ラウレル其の人であつたことを……。筆者は後日この親日家の父子にしば／＼お目にかかつた)(昭18・9、105頁)

右の一節は、読者に向けて、第八十二臨時議会の記憶を喚起するだろう。時間軸を分節すれば、①出来事（昭17・2・24）・②①の「後日」・「石坂の帰還」・「マヨンの煙」連載開始）・③臨時会議（昭18・6・16）・④「マヨンの煙」第六回」執筆・発表・⑤読者が右の一節を読む時間、と分節でき、これは「マヨンの煙」における重層化された時間軸のモデルでもある。

こうした枠組みの中で展開される宣撫行を通じて、「私」は比島人の民族性について思索をめぐらせていく。ルセナでの協力者・ロドリゲスらによる演説会の際、「私」は次の感慨を抱く。

異様に感じられたのは聴衆がよく拍手喝采することだった。米軍にあやまられたとは云へ、自分達の同胞がバタアンに立て籠つて日本軍と激戦を交へてある今日、日本を礼讃する演説を少しも疑惑や躊躇の迹がない明るい表情で聴き入り、しかも要所々々では頼まれたやうに惜しげもなく拍手の雨を浴びせるのである。これがこの民族の不幸な長い歴史が齎した性格なのであらう。執拗ではない、陰険でもない。その代りに飽きつぱく忘れ易い。この拍手がそのまま日本に対する衷心からの協力を意味するなどと考えたら、飛んでもない誤算であらう。（昭18・5、23頁）

この程度には不審を抱いていた「私」は同時に、次のようにしてフィリピン人への「親密感」も自覚し、言明していく。

揺く蠟燭の光に、赤くちかぐくと浮き出したあの顔この顔は、百年の旧知に接してやうな懐しいものに思はれた。言葉の理解が不自由な四人のフィリピン人が混つてゐたとしても、それは私共の親密感に水を差すものではなかつた。何

故なら、私共は好むと好まざるとに関はず、共同の運命を荷はなければならぬ。亜細亜人であることを赫々と感じさせられてゐたからである。（昭18・7、77頁）

もとよりここには、大東亜共栄圏構想を擁した大東亜戦争イデオロギーが前提とされ、それゆえの「共同の運命」ではある。

「二月二十二日 晴」、マリネス州の首都ナラの町での演説会において、飛び入りで「最後にビヤホールデ知事が立つて、ヴィサヤ語で演説をした」際、「驚くほど巧かつた」と感心する「私」は、一度は「宣伝班がすつかり浚われた感じ」を抱くものの、次第に「彼等の場合は、巧すぎて人を打つ真実の力を欠いてゐる事が次第に分つて来た」。それだけでなく、「私」は「一般にフィリピン人が口舌に長けてゐるといふ事に就いては、それが明かに弱小民族の一つの性格であると指摘しても誤りではないと信ずるのである……」（昭18・8、95頁）と言明するに至る。

こうした「私」の関心に関わつて、「二月二十六日 晴」には、人見中尉と「民族性」について語り合う場面が書かれる。

「私（人見中尉）はフィリピンに来る前は、北支で敗残兵の討伐や住民の宣撫の仕事をして居つたのですが、こことは恰で気分が違いますよ。支那の農民など、何をどう考へてるのか分らんほど、動きの無い深刻な表情をしてゐますからね。

〔略〕それでも我々は彼等に向つてゐると、或る血族的な親しみを感じます。何か彼等と我々の間には同じものが流れてゐるといふ気がするのです。従つて目立つた反応が無くとも、宣撫の仕事に張合ひがあるのです。／＼ところがフィリピンでは、貴方がたも御覽の通り、小隊の演説は何処へ行つても

大歓迎です。(略)そこで表面から考へると、それだけ反応がある訳ですから、此処の宣撫の方がずつと張合ひがありさうなものです。が、事実はその逆ですからな。どうも此処では、暖簾に腕押ししてるやうで、何処に鉤を引つかけたらいいのかわらんやうな気がするんですよ。……同じアジア人の血でありながら、かうも民族性が違ふものかと思えますなあ……」(昭18・11、52～53頁)

右の台詞で人見中尉は、「アジア人」の連携というイデオロギー的枠組みを前提として、宣撫工作を通じて感じた中国人／フィリピン人の差異を「民族性」・「血」に帰結させていく。この発言に対して「面白い観察」だと賛同する「私」は、重ねて「愛想がよくて社交に長じてゐるのは、フィリピン人のあまり芳しくない民族性の一つに過ぎない」と断じて、次のようにつづける。

一体にフィリピン人の民族性といふものは、従来から評判がよくなかつた。曰く軽薄である、曰くおしやれである、曰く怠け者である、曰く嘘つきである等。しかし彼等も自ら好んでさうした民族性をつくつた訳ではなく、元来アジア人でありながら、稟質が全く異なるスペイン人やアメリカ人の支配を長く被らねばならなかつた、過去の長い不幸な歴史が、それらを生み出したのである。すなはち東洋民族の美点を喪失して、西洋民族の短所だけを学びとつたといふのが、従来のフィリピン人の性格だつたのである。(同前、53頁)

ここにみられるのは、戦時下において大東亜戦争・大東亜共栄圏を正当化する支配的な言説と同様の認識・論理である。

そのことを指摘・確認した上で、そのような歴史的な枠組みの

中で、宣撫工作とともに担つたフィリピン人協力者、ことに女性がよく書かれているというのが先行研究の評価でもある。

その一人であるメメは、日本軍がフィリピンに来たことで、恋人を奪われ、結婚を逸した女性である。宣伝班で働くロドリゲスに再三誘われ働き始めたメメだが、「浅ましい我が身の上」だと引け目を感じていたという。しかし、「自分のしてゐる仕事がほんとにフィリピンの国のお役に立つてるといふことが分つて来た」というメメは、その心境の変化を次のように語っている。

民衆は戦争の恐怖に戦いて明日にも自分達が殺されるのではないかと心配してをります。その人達には日本はフィリピンを敵として戦つてゐるのではないと説き聞かせ、彼等が安心して生活出来るやうにしてやることは、ほんとに尊い立派な仕事だと思ふのです。(「三月一日 晴」原稿No.10)

こうした現地協力者の存在・発言は、(書き手＝石坂の意図とは別に)日本にとつて都合のよいものであり、従軍記に期待される対内地プロパガンダとして理想的なものでもあるだろう。やはり現地協力者のトアソンは「三月二日 雨」において、フィリピン独立まで結婚はしないと、その理由を次のように語る。

「何故つて、フィリピンはアメリカの属国ですから私共はアメリカ人の奴隷のやうなものです。もし私がそんな境遇の中で結婚すれば、やはり奴隷の運命に置かれる不幸な子供を生まなければなりません。だから私は結婚しないのです」(原稿No.25)

ここでは、トアソンにとつてのアメリカ／日本の存在が明確に峻別されている。こうしたトアソンに対し、「私」は他意なく好

意的に接しているが、その人物評価に際しては、「いわゆる知識といふものはそれほど深くはない」、「しかしアジア人としてのはつきりした自覚をもつてをり、それが彼女の人格の中核をなしてゐるので、一番われ／＼に親近な感じを与へる」（原稿No.26）とあるように、大東亜共栄圏の一員としての適性審査をしていた。宣伝班員たちへの「信頼」を抱くトアソンは、「三月四日 晴」において、それまで「純粹のフイリピン人」だと語っていた自分の出自について、「私は支那人の混血児なんですわ」（原稿No.51）と告白する。それにつづく場面では、次の会話が展開される。

「さう云へば貴女の顔は支那人らしいところがありますね」と私が云ふと、／＼「さうです、私は純粹の東洋人です……」

と、やはり支那人といふ言葉を避けて、何か邪魔物を吐き出してしまつたあとのやうにサバ／＼した口調で、急に月夜の景色の美しさを賞めたたへたりした……。 （原稿No.52）

このようにして、「マヨンの煙」では、「私」・日本側からだけでなく、フイリピン人（現地協力者）からも東洋人という絆の重要性が語られ、大東亜戦争の正当性が担保されていく。

「マヨンの煙」終盤では、宣伝班と現地協力者との交流を中心的なモチーフとする本作が隠しもつ二重基準が、マヨン山登攀によつて象徴的に書かれる。「三月五日 曇」において、「私」は「鈴木君・來住野君・清水君」とマヨン登山を決定するが、戻るとトアソンから、「どうして私をマヨンに連れて行つてくれなかつたのです？」（原稿No.60）と話しかけられる。トアソンはかつて「愛国婦人連盟を組織してゐた時に、マヨンの詩」を書き、それを「運動の目標」（原稿No.61）にしていたというのだ。本人が英訳した

詩には、「マヨンよ／秀麗にして忍耐強き山よ／お前の中にはいつも圧政に対する憤りの熱火がたぎつてゐる」、「圧政が長く続き／お前の正しい憤りがお前の耐えられる限度を越えた時／お前は赤熱の火を冲天高く噴いて爆発するであらう」、「マヨンは私達の山だ／私達はこの山の精神に見習はうではないか」（原稿No.61）とある。「私」はこの詩を「手法は幼稚だが、寓意はハッキリしてゐる」と評価し、「トアソンを山に連れて行けばよかつた」（原稿No.62）と後悔してみせる。フイリピン人・女性を排除して、ナショナル・アイデンティティーの象徴であるマヨン山を領有するようにして日本人男性だけが登攀を遂げたこのエピソードは、排除と包摂という大東亜戦争・大東亜共栄圏の論理を體現している。しかも、それは本書の表題として掲げられることとなつた。

IV

昭和一七年六月九日、フイリピンの連合国軍はすべて降伏し、徴用された文学者たちは戦後文化工作に関わつていく。そうした時期に開催された、橋本閑雪・吉川英治・火野葦平・今日出海・石坂洋次郎・武田麟太郎・田中佐一郎・向井潤吉・猪熊弦一郎・鈴木栄三郎「文化人のみた比島 現地座談会（下）」（朝日新聞）昭17・8・27夕）においては、文化工作にあつた文化人たちが一斉に、未開のフイリピンを主導して日本が文化を与えるべきだという発想を共有していた。こうした当時の発言を、単に戦後の視座から批判するのではなく、戦時下に書かれ、戦後公開された、次に引く『マヨンの煙』「後記」、「あとがき」とあわせて読むこ

とで、検討に付してみたい。

後記。この年の十二月に私共は内地に帰還した。翌十八年の十月に私は大本営の命令で再びフィリピンに出向した。私がマニラに着いた翌日、すなわち十月十四日にフィリピン共和国が誕生した。フィリピン民族多年の悲願であった独立が達成されたのである。／それはさてをき、私は、いまは大尉に昇進した人見小隊長をはじめ、当時の宣撫行に苦楽を分つた人々と再会して、久瀾を敘し回田談に花を咲かせることが出来たのは、何にも増して愉しいことであった。(原稿No.85)

ここでフィリピン独立を言祝ぐ石坂の言葉は、引用箇所後に、宣撫行をともした現地協力者たちのその後の動向が綴られていることから考えても、額面通りに受けとめてよいだろう。ただし、改段後に書かれた宣撫行を共にした日本人との再会が、「何にも増して愉し」かったという、率直な感想も見過ごせない。

さらに、戦後書かれた「あとがき」(一九七七年八月／軽井沢にて)も読んでいこう。「ある日、フィリピンにしては珍らしく険しい山容のマヨンの火山を目の前に見かけて、ある種の緊張感を覚えたことを今も忘れていない」と、宣伝班として活動した當時を生々しく振り返る石坂は、「煙をふいているマヨンよ、マヨンの煙よ」と呼びかけ、「君は屈辱的な母国の歴史に拘わらずに、今日まで、空を突き上げ、煙をはきつけて来たのだ」とその来歴に思いを馳せる。その上で、石坂は次の希望を託す。

マヨンの場合、国土そのものが、長い間、スペイン、アメリカと白人国に支配されておったので、土着民の神経もだいたい

麻痺していたにちがいないし、噴煙をふき上げてあまり効果かなかったのかも知れない。／しかし、客観的情勢がどうあろうとも、マヨンは儼しくそばだつて噴煙をふき上げることが希ましい。いつまでも永遠に――¹⁵⁾

右の一節では、大東亜戦争の帰結もフィリピン戦の意味も知つた石坂が、太平洋戦争期の日本の軍事行動への言及を避けつつ、マヨン山をフィリピン人のナショナル・アイデンティティーの象徴と位置づけている。ここに露呈する『マヨンの煙』、石坂洋次郎の功／罪は、大東亜共栄圏とフィリピンの独立とを同時に目指した太平洋戦争期日本の二重基準の反復・変奏である。¹⁶⁾

注

- (1) 拙論「帰還した南方徴用作家はどうか——尾崎士郎「朝暮兵」・火野葦平「敵将軍」」(『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房、令3) ほか参照。
- (2) 拙論「バター半島総攻撃における文化工作——火野葦平「兵隊の地図」を中心に」(『泉水英計編『近代国家と植民地性 アジア太平洋地域の歴史的展開』御茶の水書房、令4)、「バター半島総攻撃における文化工作Ⅱ——上田廣「地熱」・柴田賢次郎「樹海」を中心に」(『神奈川大学アジア・レビュー』令4・3) 参照。
- (3) 中野聡「宥和と圧政——消極的占領体制とその行方——」(『池端雪浦編『日本占領下のフィリピン』岩波書店、平8)、39頁。
- (4) 石坂洋次郎「年譜」(『昭和文学全集21石坂洋次郎集』角川書店、昭28)、412～413頁。
- (5) 館田勝弘「解説 石坂洋次郎『マヨンの煙について』」(資料

集第四輯 石坂洋次郎・原稿「マヨンの煙」青森県文学館協会、平18)、121、122頁。

(6) 巖谷大四「解説」(石坂洋次郎『マヨンの煙』集英社、昭52)、209頁、214頁。

(7) 水上勲「石坂洋次郎とフィリピン従軍」(神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家 戦争と文学』世界思想社、平8)、86頁。

(8) 島田昭男「石坂洋次郎——戦争期の一側面」(『解釈と鑑賞』平12・9)、18、19頁。

(9) 館田勝弘「フィリピン——徴用体験『マヨンの煙』を中心に」(『解釈と鑑賞』別冊 石坂洋次郎 映画と旅とふるさと)』平15・2)、212頁。

(10) 注(5)に同じ、126頁。

(11) 拙論「昭和10年代における〈文化〉論Ⅱ——日本文化／大東亜文化／世界文化」(『湘南フォーラム』令2・3)、「太平洋戦争期の文化工作言説——南方・諸民族・大東亜共栄圏」(『人文研究』令3・12)参照。

(12) 石坂洋次郎「ルソン島南部地区に於ける宣撫工作に関する総合所見」(『南方軍政関連資料』第14軍軍宣伝班宣伝工作史料集 第1巻)龍溪書舎、平8)、85、86頁。

(13) 「雄渾・聖戦完遂の『大東亜宣言』 日華条約、根本的改訂／比島、年内に独立付与」(『朝日新聞』昭18・6・17)参照。

(14) 注(6)・(8)参照。また、石坂作品における《女を主体として描く》という特徴を指摘する、三浦雅士『石坂洋次郎の逆襲』(講談社、令2)もあわせて参照。

(15) 石坂洋次郎『マヨンの煙』(集英社、昭52)、205、206頁。

(16) 《大東亜戦争》開戦時に語られた無数の「解放」言説のほとんどは、救いようもなく独善的だと指摘する中野聡は「アジア主義」記憶と経験」(『現代思想』平30・6臨時増刊)に

において、《植民地が白人＝西洋の支配からこちら側として日本占領下の「大東亜共栄圏」に入りさえすれば、それは「解放」だという発想を示している》、《この場合、植民地は「われら」の一員になることしか想定されていない》(144頁)と論じているが、戦後刊行された『マヨンの煙』もこの批判の射程圏内にある。

※原則として、初出・原稿の「マヨンの煙」は一重括弧、単行本・一般的な言及は二重括弧表記として区別した。

※本研究はJSPS科研費「P20K003233」の助成を受けたものです。

(まじもと かつや 神奈川大学国際日本学部教授)